枕詞辞典

阿部萬蔵
阿部　猛　編

高科書店

編者略歴

阿部萬蔵（あべ　まんぞう）
1895年山形県飽海郡一条村（現八幡町）に生まれる。農業に従事したのち，1923年東京電機学校卒業，1931年電気事業主任技術者資格検定（第3種）合格，東京市吏員を経て電気工事請負業を営む。
現在：無職。
〈編著書〉『萬葉集動物索引』（1981年）『萬葉集枕詞総覧』（1984年）『枕詞総覧　第二集』（1985年）
現住所　東京都小金井市緑町5-20-19

阿部　猛（あべ　たけし）
1927年山形県に生まれる。1951年東京文理科大学史学科卒業。北海道教育大学助教授，東京学芸大学教授，同学長を経て，
現在：帝京大学教授，文学博士。
〈編著書〉『日本荘園成立史の研究』（1960年）『律令国家解体過程の研究』（1966年）『中世日本荘園史の研究』（1967年）『尾張国解文の研究』（1971年）『日本荘園史』（1972年）『歴史と歴史教育』（1973年）『平安前期政治史の研究』（1974年）『摂関政治』（1977年）『菅原道真』（1979年）『近代詩の敗北—詩人の戦争責任—』（1980年）『中世日本社会史の研究』（1980年）『播磨国鵤荘資料』（共編1970年）『戦国人名事典』（共編1987年）
現住所　東京都立川市一番町6-8-40-301

枕詞辞典

1989年1月31日　第一刷発行

定価4,800円

検印
廃止

©編　者　阿部萬蔵
　　阿部　猛

発行者　髙科栄次郎

発行所　有限会社　髙科書店
〒112 東京都文京区水道2-9-8 星合ビル202 電話03(946)7595・振替東京4-255198

印刷・製本　シナノ印刷

はしがき

わが国の韻文、とくに和歌を構成する要素として枕詞を逸することができない。枕詞は、韻文・和歌の修辞法の一つであるが、それは、さまざまな名称で呼ばれてきた。発語(おこしことば)、歌枕、諷詞(よそえことば)、次詞、冠辞、そして枕詞である。しかし現在では、ほとんど枕詞という語のみが用いられるようになっている。

あをによし　寧楽(なら)の京師(みやこ)は　咲く花の　薫ふがごとく　今盛りなり(万葉集三二八番)

たいへん著名な歌であるが、ここで「あをによし」は枕詞であって、「寧楽(なら)」にかかるという。「やま(山)」にかかる「あしひきの」や、「ひかり(光)」にかかる「ひさかたの」などもよく知られている。枕詞については、古くから多くの論説があって、さまざまに定義されるが、例えば『広辞苑』(第三版)は簡潔に、「昔の歌文に見られる修辞法の一。一定の語の上にかかって修飾または口調を整えるのに用い、短(五音)長(七音)二句のうちの短句に来るのが普通であるとする。」と説明している。あるいはまた、林勉氏は「和歌の修辞I」(和歌文学会編『和歌の本質と表現』)で、「和歌またはそれに準じる韻律的文章において、下の句または文節の上に来て何らかの修飾を行うもので、かなり習慣的に固定された語」と定義している。また『日本国語大辞典』(第九巻)は、つぎのように述べている。

「古代の韻文、特に和歌の修辞法の一種。五音、またはこれに準ずる長さの語句で、一定の語句の上に固定的について、これを修飾するが、全体の主意に直接にはかかわらないもの。被修飾語へのかかり方は、音の類似によるもの、比喩・連想や、その転用によるが、伝承されて固定的になり、意味不明のまま受け継がれることも多い。この修辞を使用する目的については、調子を整えるためといわれるが、起源ともかかわって、問題は残る。

起源については諸説があるが、発生期にあっては、実質的な修飾の語句や、呪術的な慣用句であったと思われる。序詞(じょことば)とは主として音数の上で区別されるが、発生期には別であったとする説もある。古くは、冠辞、諷詞、発語、歌枕などとも称され、序詞などを含んでいうこともある。」(一〇四一頁)

ある語句を枕詞と見るか否か、それは枕詞の定義の仕方にもよるのであるが、人によって、かなり差がある。

朝髪の　思ひ乱れて　かくばかり　なねが恋ふれそ　夢に見えける(万葉集七二四番)

右の歌について、日本古典文学大系『萬葉集一』は「乱レの修飾語」としているが、澤瀉久孝氏『萬葉集注釈』や木下正俊氏『萬葉集全注』(第四巻)は枕詞であるとしている。前掲の林氏の論稿によると、「枕詞研究の従来までの唯一の集大成書ともいわれる福井久蔵氏『枕詞の研究と釈義』をみると、現段階の枕詞研究よりもかなり広く枕詞を取っていて、たとえば日本古典文学大系の万葉集・記紀歌謡・古今集・新古今集につけられた注では福井氏の枕詞は約半分しか枕詞とされていない。また山口正氏『万葉修辞の研究』所収の枕詞一覧表に挙げられた枕詞は、古典文学大系本萬葉集ではその約⅓、澤瀉久孝氏『萬葉集注釈』では約¼が枕詞とはされていない」という。このように、枕詞と認定するか否かの幅が、人によりかなり異なるのであるが、本辞典では、比較的広く採りあげる方針に拠った。

ところで、枕詞についての考察は、万葉集の研究史とともに古いが、やはり下河辺長流「枕詞燭明抄」(寛文十年、一六七〇年)、契沖「萬葉代匠記」(元禄三年、一六九〇年)あたりから本格的に採りあげられ、賀茂眞淵「冠辞考」(宝暦七年、一七五七年)に至って、実証的かつ詳細なものとなった。その後も多くの論稿が発表されたが、近代において、従来の諸説を集大成した画期的な研究が、福井久蔵氏『枕詞の研究と釈義』(有精堂、昭和二年、一九二七年、新訂増補版は昭和三十五年、一九六〇年)である。個々の枕詞について、既往の諸説を列挙した本書は、検索に頗る便宜である。その後、枕詞を網羅する試みとしては、横山青娥氏『引例枕詞正解辞典』(交蘭社、昭和八年、一九三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

三年)、大塚龍夫氏『枕詞辞典』(風間書房、昭和二十一年、一九四六年)、中島頼重氏『枕詞集成』(条例出版、昭和五十二年、一九七七年)などがある。但し、万葉集に限っていえば、辞典類には「枕詞一覧」の如きものが付されているし、また個別的な研究も頗る多く、列挙にたえない。

本辞典は、既往の諸書・論稿などを参照しつつ、記・紀・万葉から中世の歌集までを探りながら、枕詞また枕詞と考えられるものを網羅的に採録し、その数一〇七八に及んだ。必ずしも遺漏なきを期し難いが、その点は次の機会に訂正を加えることとしたい。

昭和六十三年十一月

編　者

凡例

一、枕詞はひらがなで、歴史的かなづかいにより、五十音順に排列した。

一、現代かなづかいによる検索のために、見よ項目を掲げ、→印で当該語句を示した。

一、本文の最初に、当該枕詞が修飾する語句(＝枕主詞)をひらがなで示し、「『……』にかかる」と記述した。

一、つぎに〔例〕の見出しのもとに、枕詞のかかり方を実例によって示したが、記・紀の歌謡、万葉集などの、いわゆる万葉仮名による表記の場合は、原文に拠って示した。

一、引例の歌謡については、その出典を示し、底本による番号(国歌大観番号)を付記した。但し出典については、万葉集→万葉、古今和歌集→古今、新古今和歌集→新古今の如く略称した(後記)。

一、つぎに〔注〕として、枕詞のかかり方、語義等について、簡単な解説を付した。

一、各項の末尾に参考文献等を付したが、煩を避けて略称で記載した場合が多い。列記すると左の如くである(カッコ内が略称)。

日本古典文学大系『古事記　祝詞』(大系古事記)
日本古典文学大系『古代歌謡集』(大系古代歌謡)
日本古典文学大系『萬葉集』(大系万葉)
日本古典文学大系『風土記』(大系風土記)
日本古典文学大系『古今和歌集』(大系古今)

旺文社文庫『古今和歌集』（旺文社文庫古今）
角川文庫『古今和歌集』（角川文庫古今）
日本古典文学大系『新古今和歌集』（大系新古今）
朝日古典全書『新古今和歌集』（朝日新古今）
小学館『日本国語大辞典』（大辞典）
有精堂『万葉集事典』（事典）
福井久蔵『新訂増補枕詞の研究と釈義』（福井）
横山青娥『例歌引用枕詞正解辞典』（横山）
大塚龍夫『枕詞辞典』（大塚）
中島頼重『枕詞集成』（中島）
山口　正『万葉修辞の研究』（山口）
金子武雄『称詞・枕詞・序詞の研究』（金子）
有斐閣『萬葉集全注』（全注）

一、巻末には「逆引歌ことば索引」を付した。例えば、「あさ」にかかる枕詞を求めようとするとき、「あさ」の項を見ると、「あからひく」「このねぬる」「さざれみづ」「にはにたつ」の四つが示されていて、これらが「あさ」にかかる枕詞であることがわかる。

目次（数字はページを示す）

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
298	※	281	245	216	197	155	114	78	3
ゐ	り	ゐ	み	ひ	に	ち	し	き	い
305	※	※	255	230	208	179	128	94	41
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
※	※	290	270	236	212	182	149	97	56
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え
※	※	※	※	243	215	190	153	104	※
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お
306	※	296	274	243	215	191	153	104	69

枕詞辞典

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

【あ】

あうことの→あふことの
あうことは→あふことは
あおくもの→あをくもの
あおつずら→あをつづら
あおによし→あをによし
あおはたの→あをはたの
あおみずら→あをみづら
あおやぎの→あをやぎの

あかきぬの

「ひつら」にかかる。〔例〕「赤帛之」→「純裏」（万葉二九七二）⊙赤絹の　純裏（ひつら）の衣　長く欲（ほ）り　わが思ふ君が　見えぬ頃かも（万葉二九七二）〔注〕赤い衣は表裏とも同じ色なので「ひとうら」すなわち「純裏（ひつら）」にかかる。ひつらはヒタウラの約。ヒウラと訓む場合もあるが、この場合は「緋」の縁語として用いるものかという（大系万葉三―二八二頁、大辞典九―二五頁、横山一一頁）。

あがこころ

「あかし」にかかる。〔例〕「安我己許呂」→「安可志」（万葉三六二七）⊙――吾が心　明石の浦に　船泊（と）めて――（万葉三六二七）〔注〕あかき心などということから「心明し」と同音を含む地名明石にかかる。明石浦は兵庫県明石市の海岸（大系万葉四―六八頁、大辞典一―一〇〇頁）。「わがこころ」の項を参照。

あがたたみ

「みへ」にかかる。〔例〕「吾疊」→「三重」（万葉一七三五）⊙わが畳　三重の川原の　磯の裏に　斯くしもがもと　鳴く河蝦（かはづ）かも（万葉一七三五）〔注〕畳を幾重も重ねて敷くところから「重（へ）」と同音を含む地名三重にかかるとも、畳は一重（ひとへ）二重（ふたへ）ということからともいう。三重の川原は三重県三重郡の内部川（うつべがわ）の川原（現四日市市内）という（大系万葉二―三八一頁、福井一一九頁）。

あかだまの

「あからぶ」にかかる。〔例〕「赤玉能」→「阿加良毗」（延喜式・巻八・祝詞）⊙白玉の　大御白髪（おほみしらが）坐（ま）し　赤玉の　みあからび坐し――（延喜式・巻八・祝詞・出雲国造神賀詞）〔注〕「あからぶ」とは、赤味がさす、赤くなるの意。赤玉は赤珠・明珠とも書く。赤色の玉、ま

た明るく輝く玉。琥珀、また微紅色の真珠(広辞苑一七頁、大辞典一―一〇七頁)。

あかときの

「めさましくさ」にかかる。〔例〕「五更之」→「目不醉草」(万葉三〇六一)⊙曉(あかとき)の　目さまし草と　これをだに　見つつ坐して　われを偲はせ(万葉三〇六一)〔注〕目さまし草は目覚めの時の品物。クサは品物。手向クサのクサに同じ(大系万葉三―二九八頁)。

あかねさし

「てる」にかかる。〔例〕「赤根指」→「照」(万葉五六五)「赤根刺」→「所光」(万葉二三五三)⊙大伴の　見つとは言はじ　あかねさし　照れる月夜に　直に逢へりとも(万葉五六五)〔注〕あかね色の照り映える意で「照る」にかかる(大辞典一―一一四頁)。

あかねさす

「ひ・あさひ・ひかり・ひる・むらさき・すおう・きみ」にかかる。〔例〕「茜刺」→「日」(万葉一六九・九一六)「赤根刺」→「日」(万葉一九九・三一九七)「赤根指」→「日」(万葉二九〇一)「赤根刺」→「晝」(万葉三二七〇・四一六六)「赤根佐須」→「君」(万葉三八五七)「安可祢佐須」→「比浪」(万葉四四五五)「茜草指」→「武良前」(万葉二〇)⊙あかねさす　日は照らせれど　ぬばたまの　夜渡る月の　隠らく惜しも(万葉一六九)⊙あかねさす　朝日の里の　日影草　とよのあかりの　光なるべし(新古今七四八)⊙さし焼かむ　小屋の醜屋に――あかねさす　晝はしみらに　ぬばたまの　夜はすがらに――(万葉三二七〇)⊙あかねさす　紫野行き　標野行き　野守は見ずや　君が袖振る(万葉二〇)⊙飯喫(いひは)めど　甘(うま)くもあらず　寝ぬれども　安くもあらず　茜さす　君が情(こころ)し　忘れかねつも(万葉三八五七)〔注〕アカネはアカネ科の多年生蔓草で、根から緋色の染料をとる。「さす」は色や光が映ずる意。東の空があかね色に映える意から昇る太陽を連想し「日・朝日・光・晝」にかかり、紫色・蘇芳色との色彩としての類似から、それぞれ同音の紫や国名の周防にかかる(大辞典一―一一四頁、福井一一九頁)。

あかひもの

「ながし」にかかる。〔例〕山藍もて　摺れる衣の　あかひもの　長くそ我は　神に仕ふる(新勅撰・五五〇)〔注〕あかひも(赤紐)は、大嘗祭などのとき小忌衣(おみごろも)の右肩につけて前後に垂らした紅色のひも(大辞典一―一一七頁、福井一二一頁)。

あかほしの

「あく・あかで」にかかる。〔例〕「明星之」→「開」（万葉九〇四）⊙――白玉の　わが子古日は　明星（あかほし）の　明くる朝は　敷栲の　床の辺去らず――（万葉九〇四）⊙月影に　はがくれにけり　あかほしの　飽かぬ心に　出でてくやしく（古今六帖――一・天）⊙あかぼしの　あかでいでにし　暁は　今宵の月に　思ひ出でずや（前大納言実国卿二八六六九）〔注〕あかほしは金星のこと。明星の輝く朝の意で「明く」にかかり、同音を含む「飽く」「あかで」にかかる（大系万葉二――一一九頁、大辞典一――一一九頁、福井一二一頁、中島三二頁）。

あからひく

「ひ・ひる・あさ・はだ・いろぐはしこ」にかかる。〔例〕「赤羅引」→「日」（万葉六一九）「朱引」→「朝」（万葉二三八九）「朱引」→「奏」（万葉二三九九）「朱羅引」→「色妙子」（万葉一九九九）⊙押し照る　難波の菅の　ねもころに――ぬばたまの　夜はすがらに　赤らひく　日も暮るるまで――（万葉六一九）⊙あからひく　色ぐはし子を　屠（しば）見れば　人妻ゆゑに　われ恋ひぬべし（万葉一九九九）⊙ぬばたまの　この夜な明けそ　赤らひく　朝行く君を　待たば苦しも（万葉二三八九）⊙赤らひく　はだも触れずて　寝たれども　心を異（け）しく　わが思はなくに（万葉二三九九）⊙あからひく　昼はしみらに　水鳥の　息つき暮らし（良寛歌）〔注〕「あからひく」とは、明るく光る、或いは赤味を帯びる意。実景の描写を兼ねて用いる。その色を帯びて輝く意で、日・朝・昼にかかり、赤味を帯びた美しい意の、肌に、また色の美しい意の色妙子（いろぐはしこ）にもかかる（大辞典一――一二四頁、福井一二三頁、中島三二頁）。

あきかしは

「うるわかは」にかかる。〔例〕「秋柏」→「潤和川」（万葉二四七八）⊙秋柏　潤和川辺の　小竹（しの）の芽の　人には逢はね　君にあへなく（万葉二四七八）〔注〕かかり方については諸説がある。柏の葉が露や霧でぬれてうるおう意から、潤和（うるわ）と同音を含む地名潤和川にかかるとする説、秋の柏の葉が紅葉してうるわしい意でかかるとする説、あきかしはは「商柏」で、あきないで売る意からかかるとする説、また「明柏」で清浄・神聖な柏とする説もある（大系万葉三――一八三頁、大辞典一――一三八頁、福井一二三頁）。

あきかしわ→あきかしは

あきかぜに

「なる」にかかる。〔例〕「金風」→「響」（万葉一七〇〇）

⊙秋風に　山吹の瀬の　響(な)るなべに　天雲翔ける　雁に逢ふかも(万葉一七〇〇)〔注〕季節を木火土金水の五行に宛てると、秋は金に当たるので「金風」と書く。「あきかぜの」と訓んで「山吹の瀬」にかかる枕詞とする説もある(大辞典一―一三九頁、福井一二三頁)。「あきかぜの」の項を参照。

あきかぜの

「ちえ・ふく・ふきあげ」にかかる。〔例〕「冷風之」→「千江」(万葉二七二四)⊙秋風の　千江の浦廻の　木積なす　心は依りぬ　後は知らねど(万葉二七二四)⊙秋風の吹きにし日より　をとは山　みねのこずゑも　色づきにけり(古今二五六)⊙秋風の　ふきあげにたてる　しらぎくは　花かあらぬか　浪のよするか(古今二七二)〔注〕風の古語を「ち」という(「疾風＝ハヤチ」「東風＝コチ」)。その「チ」と同音を含む「千江」に、また風の縁で「吹く」「吹上」にかかる。但し枕詞とせぬ説もある(大辞典一―一三九頁、福井一二三頁、大塚六頁)。

あききの

「ふたごもり」にかかる。〔例〕「秋葱之」→「雙納」(書紀・仁賢天皇六年)⊙――秋葱(あきき)の　轉雙納(いやふたこもり)を思惟(おも)ふべし(書紀・仁賢天皇六年是秋)〔注〕「キ」は、ねぎの古名。ねぎはひとつの皮に二本の茎が並んで包まれていることから「ふたごもり」にかかる。男女の同棲するの意であろうという(大辞典一―一三九頁、福井一二四頁、中島三三頁)。

あきぎりの

「たつ・はれる・おぼつかなし・まがき」にかかる。〔例〕⊙鏡山　あけて來つれば　秋ぎりの　けさや立つらん　あふみてふ名は(後撰八四四)⊙秋霧の　はるる時なき　心には　立ち居のそらも　思ほえなくに(古今五八〇)⊙旅衣はるかにたてば　秋霧の　おぼつかなさをいかにながめん(風雅八九一)⊙秋ぎりの　籬(まがき)の島の　隔てゆゑ　そことも見えぬ　ちかの塩釜(続古今五五二)〔注〕秋霧が「たつ」「はれる」そして霧がたちこめてあたりが見えず「おぼつかなし」に、霧に視界がさえぎられるので「まがき」にかかるという(大辞典一―一三九頁、福井一二五頁)。

あきくさの

「むすぶ」にかかる。〔例〕「秋草乃」→「結」(万葉一六一二)⊙神さぶと　不許(いな)ぶにはあらぬ　秋草の　結びし紐を　解くは悲しも(万葉一六一二)〔注〕草を結んで互いに心の変わらないことを誓いあったり、吉凶を占ったり、身の幸福を祈ったりすることがあった(大辞典一―一

三九頁、福井一二五頁)。

あきたかる

「かりほ」にかかる。〔例〕「秋田刈」→「借廬」(万葉二二四八)⊙秋田刈る　假廬(かりほ)をつくり　廬(いほり)して　あるらむ君を　見むよしもがも(万葉二二四八)〔注〕「刈る」の同音を含む「假廬」にかかる。写本によっては「秋田叫」とするが、「叫」を「刈」の誤字と見て「秋田刈る」と訓む。しかし「秋の田を」と訓む説もある(大系万葉三―一三二頁、福井一二七頁)。

あきつかみ

「わごおほきみ」にかかる。〔例〕「明津神」→「吾皇」(万葉一〇五〇)⊙現つ神　わご大君の　天の下　八島の中に――(万葉一〇五〇)〔注〕「現つ神」は現世に姿を現わしている神。ふつう神は形の見えないものであった(大系万葉二―一八八頁、福井一二六頁)。

あきづしま

「やまと」にかかる。〔例〕「蜻嶋」→「八間跡」(万葉二)「蜻嶋」→「倭」(万葉三二五〇)「秋津嶋」→「倭」(万葉三三三三)「蜻嶋」→「山跡」(万葉四二五四)「安吉豆之萬」→「夜萬登」(万葉四四六五)「阿耆豆辭莽」→「挪莽等」(紀六二)「阿企苑辭摩」→「挪莽等」(紀六三)「婀岐豆斯麻」→「野麻登」(紀七五)⊙大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　國見をすれば　國原は　煙立ち立つ　海原は　鷗立ち立つ　うまし國そ　蜻蛉島(あきづしま)　大和の國は(万葉二)〔注〕「あきづしま」のちには「あきつしま」ともいう。日本国の古称。「しま」は「くに」「地方」と同義。アキツは古くは大和国葛上郡室村(現、御所市)辺りの地名であったらしい。神武天皇が国見のとき「蜻蛉の、となめせるがごと」といったことに由来するという地名説話がある。語源については、稲のよく熟する国の意、神仙の住む島の意、上古のアキ族の集落の称とする説などがある。国見とは国の形勢を高い所から望み見ることであるが、元来は、農耕の適地をえらぶための行事という(大系万葉一―九頁、大辞典一―一四四頁、三―一二一一頁、福井一二六頁)。

あきづはの

「そで」にかかる。〔例〕「秋津羽之」→「袖」(万葉三七六)⊙あきづ羽(は)の　袖振る妹を　玉くしげ　奥に思ふを　見たまへ　わが君(万葉三七六)〔注〕「あきづ」はトンボのこと。その羽がうすく透きとおって美しいので羅(うすもの)の形容に用いる。一説に秋葉で紅葉の義とする。但し枕詞と見ない説もある(大辞典一―一四四頁、福

井一二七頁、中島三四頁)。

あきのたの

「ほ・いね・かりそめ」にかかる。〔例〕⊙秋の田の　ほにこそ人を　こひざらめ　などか心に　わすれしもせん(古今五四八)⊙秋の田の　いねてふことも　かけなくに　なにをうしとか　人のかるらん(古今八〇三)⊙秋の田の　かりそめぶし(苟且臥)も　してけるか　いたづらいねを　何につままし(後撰八四六)〔注〕秋の田の穂、穂は表にあらわれるもの、その「穂」と同音の「秀(ほ)」にかかる。また「稲」と同音を含む「去(い)ね」にかかる(福井一一二七頁)。

あきのたを→あきたかる

あきのはの

「にほひ」にかかる。〔例〕「秋葉之」→「尒保比」(万葉四二一一)⊙古に　ありけるわざの——春花の　にほえ榮えて　秋の葉の　にほひに照れる　あたらしき　身の壯(さかり)すら——(万葉四二一一)〔注〕「にほふ」とは美しく照り映える意。秋の紅葉した葉の美しく照り輝く意で「にほひ」にかかる(大辞典一—一四八頁、福井一二八頁)。

あきのよの

「ながき」にかかる。〔例〕⊙きりぎりす　いたくななきそ　秋のよの　ながきおもひは　我ぞまされる(古今一九六)〔注〕秋の夜長の意で「ながき」にかかる(大系古今一〇三頁、一四一頁)。

あきはぎの

「しなひ・うつる・はなの」にかかる。〔例〕「秋芽子之」→「四搓」(万葉二二八四)「秋芽子之」→「花野」(万葉二二八五)⊙ゆくりなく　今も見が欲し　秋萩の　しなひにあらむ　妹が姿を(万葉二二八四)⊙秋萩の　花野の薄　穂には出でず　わが恋ひわたる　隠妻(こもりづま)はも(万葉二二八五)⊙吹きまよふ　野風をさむみ　秋はぎの　うつりもゆくか　人の心の(古今七八一)〔注〕「しなひ」は、しなやかに曲線をなして美しいこと、こんもりと繁ること、春の山、秋萩、藤の花房、美しい女性の姿にたとえる。秋萩のしなやかに美しいところから「しなひ」にかかる(大系万葉三—一三九頁、大系古今二五五頁、福井一二八頁)。

あきやまの

「したふ・したび・いろなつかし」にかかる。〔例〕「秋山」→「下部留」(万葉二一七)「金山」→「舌日」(万葉二二三九)「秋山之」→「色名付思吉」(万葉三二三四)⊙秋山の　したへる妹　なよ竹の　とをよる子らは——(万

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com